

# エキスパートセミナー



## 支援機器の活用で重度障害者の 「できる」「わかる」をみつけよう！

引地 昌久(ひきじ あきひさ) 一般社団法人できわかクリエイターズ

### 略歴

一般社団法人できわかクリエイターズ  
代表理事。

吉備国際大学保健福祉学部作業療法学科を卒業。西部島根医療福祉センターに所属し、重症心身障害児者を専門とする作業療法士となる。

島根県作業療法士会の理事として島根県の作業を療法の普及啓発活動を行いながら、全国に活躍の場をひろげ、研修会や体験会の講師依頼、重症心身障害児者の自宅訪問を実施。

現在は一般社団法人できわかクリエイターズを設立し、重度障害児者へのテクノロジー活用の普及、サポートを行い、重度障害児の可能性を探求し続けていく。

重度障害児者の作業療法の目的は何だろうか？重度障害児者にとって、まず命を守ること、生活を楽にすることが第一の目標となる。活動自体も感覚刺激のような受動的な活動が中心となる。もちろん能動的に操作できる機器がなく、選択肢が少ないという原因もある。しかし、重度障害児者の自発的な動きがほとんどないことから「何もできない」、反応の表出が少ないと「何もわかつていない」と、関わる支援者自身の過小評価も支援の妨げになつていいだろうか。

特に重度知的障害を併せ持つ重症心身障害児者と関わる際、「どう感じているのか」「何を伝えたいのか」、私自身も常に疑問に感じながら支援している。今まで私たちは重症児者の意思を、表情や筋緊張、呼吸状態、脈拍などから推測するしか手段を持っていなかった。しかし、反応の乏しさにより、こちらの関わりが届いているのかどうかさえも判断できないことが多い状態であった。また、意思伝達手段として多くの支援機器が活用されているが、そのほとんどは正確な入力機器の操作や高い認知機能を必要とする機器ばかりで、重度の身体障害と知的障害を持つ方にとっては操作が困難であった。

その中で、視線入力装置という眼の動きで操作できる機器が近年注目されるようになった。今まで筋萎縮性側索硬化症や脊髄性筋萎縮症など重度身体障害者の意思伝達装置としての使用が主であり、重症心身障害児者への活用はほとんど報告例がなかった。しかし、重症心身障害児者と関わる中で、人の動きや光刺激に対して小さいながらも反応を示す方は多く、視線入力装置を活用することで何か反応を受け取れないか検証を行った。結果、多くの支援者がコミュニケーションは困難を感じていた最重度の重症心身障害児者でも、画面の変化に気付き、画面の標的に視線を向ける反応があることが分かった。さらには、見え方に個々の特徴があること、個々の見やすい場所を知ることができた。これらを客観的に評価できることにより、見え方に考慮しながら声かけなどのコミュニケーションをとることができるようになった。そして何より重症心身障害児者が支援者の関わりに対して反応をしていることを、支援者自身が知ることができたことにより、コミュニケーションのモチベーションの向上を図ることができた。さらに、何に反応しやすいのか、何が好きなのなどを客観的に評価する、シンボルコミュニケーションで意思を表出する、文字入力をするなど、個々の能力に沿った意思伝達支援の選択が可能となる。視線入力装置は、重症心身障害児者との意思伝達支援の新しい入り口を作れるのではないかと期待される。

テクノロジーは日々進歩しており、私達の生活もどんどん豊かになっていく。それは重度障害児者も同じである。支援機器の活用により、遊びや学習、芸術活動など様々な活動が可能になっている。そして今後はどんどん社会に出て、働くことも当たり前になるだろう。重度障害児者の可能性はひろがり続けている。重度障害児者もたくさんの力を持っており「できる」ことがたくさんあること、私たちが受け取れていないだけで色々なことを「わかる」力を持っていることを知ってほしい。そして、「できないこと」に目を向けるのではなく、「どうやつたらできるか」を重度障害児者と、家族と、作業療法士と、すべての支援者と、一緒に考える支援をしていきたい。